

王朝人の和歌生活

—— 恋愛贈答の種々相 ——

山代水緒

序

和歌は、王朝の貴族達にとつてどのようなものだったのだろうか。独詠歌、歌合や屏風歌など様々な歌のうち、私が特に興味をひかれるのは、詠み交わす贈答歌である。自分の思いを歌にして伝えるとはどういうことなのか、芸術的鑑賞の対象としてではなく、和歌が生活の中でどのような役割を果たしていたのか、様々な贈答歌の「場」を検討することによって王朝の貴族たちの恋愛生活をみていきたい。

この論で対象とする贈答歌は、古今・後撰・拾遺のいわゆる三代集から、詞書や他出文献を元に抽出した。勅撰集を対象としたのは、なるべく様々な人物の様々な状況を見たかったということ、また多分に文芸化されているとはいえ、作品形成のために歌が使われる物語や日記よりも、生の歌がそのままの形で残っている

と思われたためである。

その際、用例数は贈答をろっているものも、贈歌のみ、答歌のみのものもそれぞれ一例としてカウントし、その結果、古今集一〇九、後撰集六八四、拾遺集三三三の計一〇二六例が抽出された。その用例をふたりの関係や詠まれる状況ごとに次のように分類した。その下に記したのは、三代集中の用例の数と、その一部の歌番号である（用例数は、「身分違い」かつ「変心を恨む歌」である場合など、重複している部分もある）。

一 身分差のある贈答

1 天皇と臣下	29	古今	997	後撰	5 6	1378	1379	1380
2 上下関係	不遇を訴える	9	後撰	135 136	1077 1078	1079	1109 1110	
			1381	拾遺	305	320 321	512	

二 同性の贈答

4 問答	3 恋歌	2 恋敵	哀傷	慶賀	1 挨拶	3 恋	挨拶
優劣問答	女同士	男同士	女同士	男同士	離別	女が高位	男が高位
後撰 511	2 後撰 909 910	5 後撰 1084 1094、 拾遺 737	2 後撰 1406 1407、 拾遺 1421	3 後撰 662 1163、 拾遺 1191	8 古今 349 364、 後撰 1369 拾遺 1373、 拾遺 333 334	11 後撰 1424 1425、 拾遺 1303	38 古今 369 371、 拾遺 322 323、 487
						12 後撰 756 757、 758 759、 798 799、 927	106 後撰 967 1169
							4 古今 869 914、 915、 後撰 1111 1112、 拾遺 1125 1194、 拾遺 444 574 575

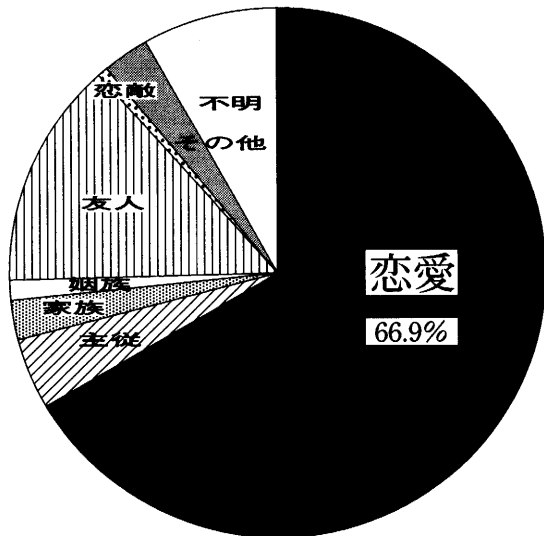
四 家族の贈答

1 親子	父と息子	0	2 姻族	妻の家族	8	3 変心	1 求婚	9 謎かけ
父と娘	母と息子	母と娘	夫の家族	妻の家族	母と娘	4 昔の恋人	2 結婚	9 拾遺 513 523
後撰 203 1310、 拾遺 309 494、 1284	古今 368 862、 900 901、 拾遺 473	後撰 461 拾遺 317 1080	3 後撰 470 1223 1295 1296	8 後撰 13 348 183 807 868	6 古今 368 862、 900 901、 拾遺 473	29 後撰 512 513、 627	171 古今 476 477、 後撰 707	
							86 後撰 913、 拾遺 710	
							178 後撰 667 530 531	

以上のような分け方をすると、「異性の贈答」が圧倒的に多い。全贈答歌をふたりの関係から分類した左上のグラフを見ると、

異性間の恋歌の贈答が、実に七割近くを占めていることがわかる。

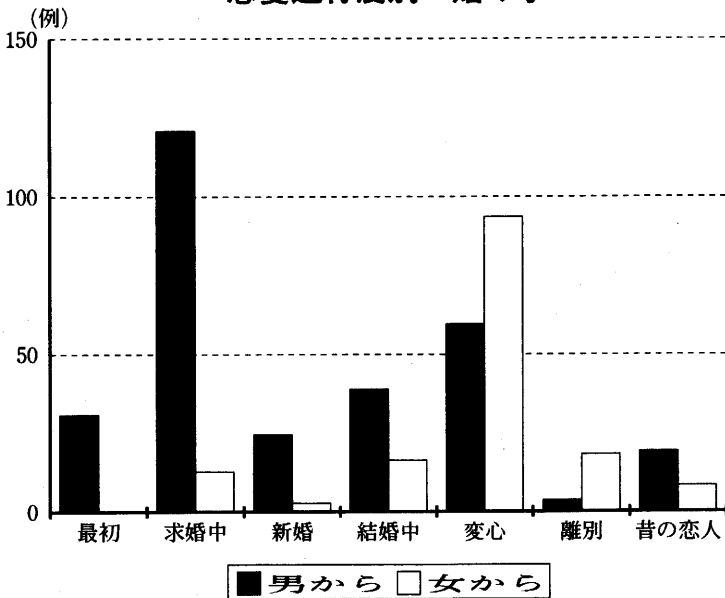
関係別贈答歌用例比率



異性間において最も贈答歌の需要が高かったことは、容易に想像がつくことではあるが、ひとつひとつの用例を見ていくと、そこには様々な人間模様が見えてくる。

そこで、恋愛の進行に従い、各場面で男女どちらから手紙や使者を送ってはたらきかけているかを示したのが、下のグラフである。

恋愛進行度別 贈り手



ふたりの仲が進むにつれて、女からの働きかけが多くなっていくことがよくわかる。

これを踏まえ、実際の男女の関係がどのようになっていくのか、歌のやりとりからみていこう。

一 結婚まで

1 初めてのアップローチ

恋がはじまるきっかけは、何だったのか。三代集には、男が女の姿を「ほのかに見て」「かいま見て」恋をし、歌を贈っている例が五例あり（古今476、後撰687・688・987、拾遺636）、それ以外の機会は詞書からは見つからなかったのだが、垣間見の用例も少なく、一目惚れが多かったとは思えない。たいてい、「人をみて思ふ思ひもあるものを空にこふるははかなかりけり（後撰60）」とまだ見ぬ人に初めての文を贈るのである。男は自分の従者や、その女性の父や兄から噂を聞き、色々と想像していたのだろう。高貴であるほど、その人を見ることはもちろん、直接話すことなどできなかつたので「噂に聞く貴女に直接逢いたい」と歌を次々と贈り、その返事から、少しでも相手の人柄や才覚、脈の有無を探ろうとした（もちろん文を受け取る女の方も同様だが）。しかし、求婚の贈歌に対して返事があるものはわずかで、それも白紙だったり（後撰697）、ただ「見ました」という素っ気ない返事だったり（後撰764）と、前途は多難そうである。

女から声をかけてくることはほとんどない。あるとしたら齋木泰孝氏の言われるような「宮仕え人」と呼ばれる宮廷女房たちくらいだっただろう。

2 求婚中

求婚中の恋歌の内、返歌があるのは約半分であるように、恋の進行はなかなか難しい。

ふみつかはせども返事もせざりける女のもとにつかはしける
よみ人しらす

あやしきもいとふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき
（後撰608）

いくら文をやっても何の返事もなくても、簡単にはあきらめない。小町谷照彦氏が論考されたように⁽²⁾、求婚の歌にすぐ反応するのはむしろはしたないことで、何度も言われてようやく一度返事をするという程度が普通だったのだ。しかし、あまりに無視され続けるとしびれをきらす。返歌があるかどうか、またその頻度が、女が自分にどれくらい興味を持っているかのバロメーターになるからである。

物いひ侍りける男いひわづらひて、いかがはせむ、いなともいひはなちてよといひ侍りければよみ人しらす
小山田のなほしろ水はたえぬとも心の池のいひははなたじ
（後撰791）

このように、だめならだめとはつきり言ってくれと言うこともあった。そしてようやく得た女の歌は、「私の心の中は明かしません」というはっきりしない答えである。ずいぶん思わせぶりだが、ともかくも返事を迫り、それは果たしたわけであり、また「否」と言っているわけでもない。女の心が男の熱心さにほだされかかっているように思える。

3 応酬

返事が返ってくるようになると、いわゆる応酬が始まる。
女のもとにつかはしける
源中正

あふみちをしるべなくても見てしがな関のこなたはわびし
かりけり

返し

下野

道しらで止みやはしなぬ逢坂の関のあなたは海といふなり

(後撰 785 786)

このように、女は逢った後の心変わりを恐れて拒絶すること
が多い。体のいい口実ともとれるが、男を嫌うのではなく、深い
仲になる前に釘を刺しておこうという意図だろう。

男のことを心から嫌う場合も、先行きに不安があり踏み切れ
ない場合もあるだろうし、安く見られたくないとか、少し焦らし
て本心を見極めよう、等の理由もあっただろうが、女の拒否は、
一種のポーズであり、冷たくしていたら本当に男があきらめてし
まったので慌てて贈った「忘れねと言ひしにかなふ君なれどとは
ぬはつらきものにぞありける(後撰 928)」という身勝手な歌もあ
る。相手が凡庸な歌を詠んでくる内は逢おうという気にならない
かもしれないが、このように応酬が続き、だんだん気心が知れて
くるのだろう。

二 結婚

1 初夜

歌のやりとりが進む内、いつ実際に逢うことになるのだろうか。
勅撰集にはつきり状況のわかる歌はないが、その後朝の歌は
多い。その内容は三タイプに分かれる。

A「飽かぬ別れ」・「朝が恨めしい」 一番多いのが、物足

りない、別れ難いというものである。これが「常よりも起きう
かりつる暁は露さへかかものぞありける(後撰 913)」のよ
うに、別れなければならぬ朝がくるのが恨めしいという表現
になる。

B「恋心がつる」 次に多いのが、「逢ひ見ての後の心にく
らおれば昔は物も思はざりけり(拾遺 710)」のように逢って恋

心が暮るといふ歌である。

C「夜が待ち遠しい」 別れてしまつたら、次に逢えるその

夜が待ち遠しいと「あふことを待ちし月日のほどよりも今日の
くれこそひさしかりけれ(拾遺 714)」と言う。

AとBを一緒にしような「日のうちに物を二度思ふかな
とく明けぬると遅くくると(拾遺 723)」などもあり、少しでも
長く一緒にいたいという想いが伝わってくる。

後朝の歌は、求婚の歌と同じく男から贈るものだが、女から
贈ることも皆無ではない。

男のもとにつかはしける

中務

はかなくて同じ心になりにしを思ふがごと思ふらなやぞ

返し

源信明

わびしさを同じ心ときくからに我が身をすてて君ぞかなし
き

(拾遺 594 595)

「信明集」92の詞書に「はじめてのつとめてかへりたる、女」
とある。逢った後で男への愛を覚え、自分と同じほど相手が想っ
ているか心配になった。珍しい相思相愛の後朝なのだが、女から
というのは、後朝の歌も奇越さなない男に催促したのかもしれない。

2 両想い

男の懸想の歌は数多いが、女が素直に答えて恋心を歌う歌は本當に少なかつた。

月明かりける夜、女の許につかはしける 源信明

恋しさは同じ心にあらずともこよひの月を君見ざらめや

返し 中務

さやかにも見るべき月を我はただ涙に曇る折りぞ多かる

(拾遺78789)

男の恋心に女は切々と答える。この歌を貰つた信明はきつと飛んでいったことだろう。

浮気な男と恋仲になつて男の言葉をすべては信じられず、いつ飽きられるだろうかと心配する歌(後撰897)もあるように、結婚は、婚姻届を出すわけでもなく、通っている間だけのものだったので、いつ心が離れていくか常に心配していたことがよくわかる。

3 片想い

桂のみに住みはじめける間に、かのみこあひ思はぬ

気色なりければ 貞数の親王

人知れず物思ふ頃の我が袖は秋の草葉におとらざりけり

(後撰901)

このように、関係を持つてからも打ち解けない女性に贈つたという歌がいくつもあり、相思相愛でなくてもふたりの関係が始まつてしまうこともあつたことがわかる。

また珍しい例だが、「泊まれと思ふ男の出でてまかりければしひていく駒の脚折る橋をだになどわが宿に渡さざりけん(後撰

939)と男を慕う歌もある。この歌は贈つたものではないかもしれないし、恋愛関係でもなんでもない男に恋していたのかもしれないが、女の方の片想いはこの他にあまり見あたらない。

4 忍ぶ恋

恋人の中には、正々堂々と公表できない人たちも大勢いた。身分の問題や、世間的に認められた夫がいるとか、好き者という噂を厭うなど、ここにもさまざまな理由があつた。言い寄る男性に惹かれていても、人目を気にして拒絶している女(後撰1018)や、ことを公にしようと女に訴える男(後撰727)などが勅撰集にみられる。

また、男の方が名を惜しむ例もある。

橘清樹が忍びにあひ知れりける女のもとより、をこそ
たりける

思ふどちひとりひとりが恋ひ死なば誰によそへて藤衣着む
返し 橘清樹

泣きこふる涙に袖のそほちなば脱ぎかへがてら夜こそは着
め (古今 654 655)

この贈答は戯れあいにも見えるが、彼女の本心は、正々堂々と藤衣——喪服——を着られるようになりたい、忍ぶ仲はもう嫌だということではないか。すると清樹の言う「夜に着よう」とは、昼に着るのは慎もう、つまりは公表するつもりがないという意味になる。それが表の意味ではないとしても、忍ぶ関係への不満が底には流れている気がする。

三 心変わり

1 浮気

異女に物言ふとききて、元の妻の内侍のふすべはべり
ければ 好古の朝臣

目も見えず涙の雨のしぐるれば身の濡れ衣は干るよしもな
し

返し

中将内侍

憎からぬ人の着せけん濡れ衣は思ひにあへず今乾きなん

(後撰 955)

このような言い合いを歌でしている。

女のもとにまかりにけるを、もとの妻の制し侍りけれ

ば 源景明

風をいたみ思はぬ方に泊まりする海人の小舟もかくやわぶ
らん (拾遺 963)

彼女も、夫が他の所に行くのを阻む。夫を愛するゆえの嫉妬
なのに「激しい風に思わぬ所に停まる海人の小舟もこれ程わびし
い思いをするものか」と言われては立つ瀬もない。

同居の夫婦ではなく、通い先のひとりであった女性が「ほか
の瀬は深くなるらし飛鳥河昨日の淵ぞわが身なりける」と恨むの
に、男が「淵瀬ともいさやしら浪立ち騒ぐ わが身ひとつは寄
る方もなし(後撰 525 526)」と一蹴するような歌もあり、男も恨ま
れたら機嫌を取り結ぶとは限らず、開き直っていることもある。

また、浮気はもちろん男だけではない。女が他の男に気を移
すこともよくあった。

神無月のついたち頃、妻のみそか男したりけるを、み
つけて、言ひなどして、つとめて よみ人しらず
今はとて秋はてられし身なれどもきりたち人をえやは忘る
る (後撰 1300)

間男の現場をとりおさえたのか、「言ひなどして」とは、夜じ
ゆう女を責め続け喧嘩していたのではないだろうか。それで言い
過ぎたと思つて、翌朝この歌を贈つたのだろう。

他の人に心を移し、元の人をなだめる歌、新しい恋人への言
い訳の歌、それぞれ歎心を買うような表現になることが多い。

2 無沙汰

心変わりをするころになると、女性から歌を贈ることが俄然
多くなるのはグラフにも見られる通りである。男がしばらく訪問
もせず、手紙すら奇越さないとすると、女は忘れられたのではな
いかと不安になることだろうが、歌に表れてくるのは不安よりも、
恨みや嫌みであり、男のほうも歎心を買うより、苦しい弁解、嫌
みな返事をするが多くなる。

例えば女が「高砂の松を緑と見しことは下の紅葉を知らぬな
りけり」と葉の色の変化を心変わりに喩えて恨むと、男は「時わ
かぬ松の緑も限りなき思ひにはなほ色やもゆらん」と紅葉の赤さ
を想いの火だと逆手にとつて返している(後撰集 834 835)。うまく
返したものだとは思うが、誠実に欠けるのではないだろうか。

あひまちける人の、ひささう消息なかりければ、つか
はしける 紀乳母

影だにも見えずなりゆく山の井の浅きよりまた水や絶えに

し

返し

平定文

浅してふことをゆゆしみ山の井はほりし濁りに影はみえぬぞ
(後撰 531)

これは完全に開き直り、屁理屈を言っているとしか思えないが、彼女はこれで納得したのだろうか。ふたりの気持ちに溝ができ、義務感のみで付き合っている感でさえある。

3 長年の無沙汰

何日か来ないのがつもりもって、何年も音沙汰なしになつてしまふこともあった。

年ごろありて、人きて帰りに

ころもだにへだてしよひはうらみしにすだれのうちのこゑぞかなしき

返し

内外なく馴れもしなまし玉すだれ 誰年月を隔て初めけん

(中務集 192)

拾遺 898 には「年を経て信明の朝臣まうで来たりければ、簾越しにすへて物話し侍りけるに」の詞書で中務の歌だけ入っている。仲のよさそうだったふたりも破局を迎えたのだ。これは関係が絶えて何年か経って、信明が中務の許に行ったときの歌である。制裁のつもりか、年老いた姿を見せたくなかったのか、簾中に入ることなく信明は帰り、それを恨んでの贈答なのだが、かつての夫婦も、年を隔てると夜を共にしなくなるのだ。

4 忘れる

ひとの心かはりにければ

右近

おもはんとたのめし人はありときくいひしことのはいづちいにけん
(後撰 665)

『大和物語』に「わすれじとよるづのことをかけてちかひけれど、わすれにけるのちにいひやりける」の詞書で同じ右近の「わすらるる身をば思はずちかひてし人の命のおしくもあるかな(拾遺 870)」が入っており、明記はないものの、相手は同じ敦忠であると思われる。百人一首で有名なこの歌は、相手の命を素直に心配したという説と、皮肉だという説と解釈が古くから分かれているが、『大和物語』を信用した上で後撰集歌との関連で考えると、「忘れられてしまふなんて思わずに、ずっと愛し続けると誓いを立ててくださったけれど、約束を破ったあなたが生きていられるか心配ですよ」「ずっと思い続けると誓った(くせに破った)あなたは健在と聞きましたが、あの言葉はどこに行っちゃったんでしょね。生きているならその誓いは破られていない事になるのに、来ていないのだから、誓い自体がどこかに行っちゃったんでしょ」とどちらも皮肉にとれる。

女のもとより忘れ草を文につけてをこせてはべりければ
よみ人しらず

思ふとは言ふ物からにともすれば忘るる草の花にやはあらぬ
返し

返し

大輔の御といふ人

植えてみる我は忘れであだ人にまづ忘らるる花にぞありける
(後撰 551)

この二人は、実際に疎遠になったのではなさそうだが、忘れられることをいつも気にしていたのだろう。

5 別れ

恋人たちの別れは、自然消滅も多かったらしいが、絶縁宣言をしている場合もあった。

守り置きて侍りける男の心かはりにければ、その守り
を返しやるとて　これひらの朝臣の女いまき

世と共になげき糶りつむ身にしあれば　なぞ山守のあるか
ひもなき　(後撰76)

護符のかいもなく、嘆きをつむ身になつてしまったので、用なしのお守りはお返ししますとちくりと皮肉を入れている。この場合は、相手の男が置いていったものを返すことでけじめをつけているが、次もそうである。

右大臣住まずなりにければ、かの昔おせたりける文
どもをとり集めて、返すとて、よみておくりける

典侍藤原因香朝臣

頼めこし言の葉今は返してむ　わが身ふるれば置きどころ
なし

返し

近院右大臣

今はとて返す言の葉ひろひおきておのがものから形見とや
見む　(古今736/737)

近院右大臣源能有が因香のもとを訪れなくなつてしまったので、女は昔もらった手紙をみな返した。小学館の『古典文学全集』では「盛りを過ぎた女性の嘆きを謙虚に訴えた」というが、私に

は心変わりした人から昔もらった甘い手紙など見たくないという気持ちで潜んでいるように思える。もつと勘ぐれば、「昔はあなたこんなに愛の言葉を書いていたのよ、見なさいよ」という嫌みでさえあったかもしれない。本当に見たくないなら自分で捨ててしまえばよいわけで、後生大事にとつておいた私の気持ちもわかつてほしいといっているのではないだろうか。そして能有の方は、絶縁宣言を受け入れたという形になる。

たまさかに通へる文をこひ返しければ、その文に具し
つかはしける　元良の親王

やれば惜しやらねば人に見えぬべし泣く泣くも猶返すまじ
れり　(後撰114)

忍ぶ恋の相手から、文を返してほしいと言われた。それが見つかつたら身の破滅だという。女は『元良親王集』によれば京極御息所である。宇多院の愛妃と密通していることが露見しては大変だと泣く泣く返したのである。

このように、夫婦の関係解消する時には装束や鏡など互いの持ち物や贈り物、手紙すら相手に戻すことがあつたらしい。そういう物にはその人の魂がこめられているから、勝手に処分できなかつたのだろうか。『源氏物語』に、出家を控えた源氏が文を焼く場面があるが、手紙はずつとつておくものだからこそ、返却を求めることがあつたのだ。

この別れの歌を見て思うのは、これが離縁状というよりは、最後通牒ではなかつたかということである。相手の真心に訴える最後の手段として歌を贈っているように思う。これで慌ててまた言い寄ってくるのでは、と淡い期待を抱いているのではないだろ

うか。

四 昔の恋人

1 思い出す

忘れた人のことを思い出し、「打ち返し君ぞこひしきやまとなる布留の早稲田の思ひいでつつ」などと連絡をすることもままあった。しかししたい「秋の田の稲てふ事をかけしかば思ひ出づるがうれしげもなし」とけんもほろろな答えが返つてきてしまふ（後撰512、513）。喧嘩別れ、または自然消滅した仲だと関係修復は難しいらしい。

2 懐古

別れるにはやむをえない事情もある。「いにしへの野中の清水見るからにさしぐむものは涙なりけり（後撰813）」は不本意ながら別れてしまった相手の昔の手紙に、「年月を経ても逢おう」と書いてあったのを見て、贈ったものである。「野中の清水」は「いにしへの野中の清水ぬるけれど元の心を知る人ぞくむ（古今887）」から来ていて、つまり、昔を知る人なら想いをくんでくれ、と恋しくなったということだろう。

また、久しく来ない男が、「いかにぞ、まだ生きたりや」と聞いてきたので、「つらくともあらんとぞ思ふよそにても人や消ぬるときかまほしさに（後撰627）」、あなたが死んだと聞きたいから、生きながらえていますと答えるという、詞書の「戯れて」がなかったら随分物騒な歌もある。だが、このような冗談を交わせる仲

だったということは、いい付き合い方をしていたのだろう。昔を思う歌は、別れた時は多少恨んでいたとしても、もう良い思い出となつてからこそ詠めるのだろう。

こう見てくると、一度別れた恋人同士がよりを戻すことはあまりないように思う。どちらかが望んでも相手がはねつけてしまう例がほとんどで、あとはもう親友のようなやりとりをしているようだ。

異性の贈答を関係を追つて見ていくと、求婚までは男が情熱的に言い寄っているのに、結婚した後は女が嫌み・恨みを贈るというパターンが非常に多い。

心変わりによくあること、というよりもこの時代、生涯妻をひとりしか持たないという人がいたのかどうかすら疑問だ。女の方もそれを承知していただろうが、嫉妬は自分の心でどうにかなるものではない。求婚するときせせと歌を贈つてきたように、きつと今頃あの女にもそんなことを言っているに違いないと不誠実さを恨むのだろう。

だが男からすると、一生懸命アタックして気を持たされてやつと逢えたのに、期待はずれだったということもよくあったのだろう。現代でも離婚が絶えないのだから、本人と実際に会わずに始めてしまう平安貴族達の恋が長続きしなくても仕方ないのかもしれない。

五 恋の障壁

さて、ここで少し視点を変え、男女の間に横たわるさまざま

な問題を考えてみたい。

1 身分差

結婚はたいてい同じくらしいの身分の相手とするが、身分の違う相手と恋に落ちる例は多く、特に男性の方が高位の場合が目立つ。一番多いのは、公卿と宮廷女房、次が親王など皇族と女房の組合せである。歌の上では、彼らは特に身分を意識せず、対等につき合っているように見える。中級貴族の娘にとって玉の輿に違いない相手にも、かなり辛辣な返事をしてるし（後撰736）、女から贈る場合も、一般的な例と変わらず恨みつらみを述べているものが多い。ふたりの関係が進めば、自然と対等な関係になっていくというのはよくわかる。歌から見ると、恋には身分や年の差など関係ないと言ふところだろう。

しかし、実際の関係とは少し違うのではないだろうか。大臣とでも対等な口をきいているように見える歌では、女は伊勢や大輔といった名前が並ぶのである。彼女達は「恋多き女」のように考えられているが、それは彼女達が優れた歌人で、その歌が多く残っているからであり、色々な男性との交際は、当時の宮廷女房には普通のことだったのだろう。つまり、どちらかという遊びの相手と見られると言ふことであり、それから自分を守るにはせめて歌で突つばねる姿勢を見せる必要があったのではないだろうか。さて、小町集の「思ひつつぬればや人の見えつらん 夢としりせばさめざらましを」等の一連の恋歌は、「歌それ自体の発散する異様な慕情」といったことから、人目をしのお高貴な相手へ贈つたものと古くから言われてきた。女から恋心を述べる歌は

少なく、天皇への歌でも「数ならぬ身に置く宵の白玉は光見えさす物にぞありける（後撰116）」のように自分を卑下する歌はあまり見られないのだ。この作者も女房の一人であろうが、彼女や小町の歌はかなり激しい愛情表現であり、それはやはり相手が「高貴な人」だから出せたものなのだろう。事実、女が素直に恋心を詠む僅かな例の内、身分のわかるものでは、必ずと言つていいほど女性の身分が男性より低かった。

一方、女が高位の例は非常に少ない。

女四の親王にをくりける

右大臣

葦たづの沢辺に年はへぬれども心は雲のうへにのみこそ

返し

あしたづの雲るにかかる心あらば世をへて沢にすまずぞあらまし
(後撰757)

出世頭の藤原師輔も、内親王勤子を雲の上の人として見てるのがわかる。実際、「継嗣令」の規定により、賜姓されない内親王と臣下との結婚は禁止されており、それを実質的に破つた第一号が師輔だった。しかも後に彼は彼女の妹ふたりとも結婚した。皇女を、それも姉妹を三人も妻にしたのはおそらく師輔だけだろう。最後に康子内親王と結婚した時にはひどく非難を浴びたという。

その上、妹・稚子の所から、「並みたてる松の緑の枝わかずをりつつ千代を誰とかは見む（後撰384）」と勤子に贈っている。ふたりとも愛してるけれど本当に長く一緒にいたいのはあなたの方です、とはどちらに対しても失礼ではないか。雲上人とも思つていた人も妻にしてしまえばもう対等の関係なのだろう。

女性が安心して恋心を伝えられるのは高位の相手にだけだと

いうことなのか。女性がつれないのは、必ずしも相手が気に入らないからというばかりではないのは、先にも述べた通りだが、気心も知れた高位の相手には、もともと下の身分ということもあり、真情をさらけ出すことができたのではないだろうか。

2 家族

親は、ふたりの間に立つという意味でも、家柄や財力などによる相手の選択ということでも、結婚に大きく関わる。年端の行かない娘には、まず親に歌を贈る例（後撰13、183）がみられるし、父の方から娘に言い寄る男を牽制することもある。

相撲の還饗の暮つ方、女郎花をとりて敦慶親王のかざしにさすとて
三条右大臣

女郎花 花の名ならぬ物ならば 何かは君のかざしにもせん

年頃、家の女に消息通はし侍けるを、女のために軽々しなどと言ひてゆるさぬあいだになん侍ける（後撰348）

この場合は、実方がプレイボーイの敦慶に釘を指したところだが、ぱっとしない男を親が認めないこともある（後撰85）。

こうしてみると親は反対ばかりしているようだが、大切な婿がねについては後押しもする。特に、「伊勢物語」十段や、「蜻蛉日記」などのように、父親がしぶつても母親が積極的に動くことはしばしばあったらしい。そして、母親は娘の代わりに男とやりとりすることがあるのだ。これは結婚してからも同様で、心変わりしたり、つむじをまけて来なくなってしまう男と女の母親がやりとりする例が見られる（後撰114、126）。これは特別過保護だ

ったからではなく、母親は娘の代弁をする存在だったということだろう。

一方、女と夫の両親とのつながりは希薄だったらしく、歌のやりとりは三代集中に見つからなかった。結婚に関しては、男の親が結婚に反対したり（後撰101）、女の元にきちんと通うように諭す（後撰425）ことはあっても、間に立ちはしなかったようだ。

しかし、夫の姉妹とのやりとりはあった。しかも、後撰集にあった三首（471、223、1295）とも、男の訪れが絶えた女とその義姉妹の贈答である点は目を引く。男が自分のもとに通ってくる内は、その後ろにある家や家族の思惑を気にせずに行られるし、また逆に自分の男兄弟の通う女などいちいち干渉してはられないのが実状だろう。しかし、男が通つてこないとなるとその家族、特に姉妹に連絡をつけることがあったのだ。

これが相手の親や男兄弟でないのはなぜか。姑に訴えたのはプライドの問題もあろうし、かといって男兄弟は、いや下手をすれば父親も「お兄さんが来ないんです」と泣きついたら、和泉式部日記の帥宮のように「ではよく似ている私が代わりに」などと言ひ出しかねず、危険である。そして何より、姉妹ならばだいたい同年代で境遇も近いので同情も引きやすいし、たいていの男は姉妹に弱いということもあったのではないだろうか。

3 恋敵

一番の障壁が恋敵である。しかし火花が飛ぶような歌は実は女性同士にはあまりない。「大和物語」一四一段のように、男が留守で妻ふたりが仲良く同居するなどという特殊な例は除いて

も、妻や愛人が故人をとともに偲んでいる（後撰1405 1406 1407）くらいである。

たとえば、『蜻蛉日記』で道綱母が兼家の正妻時姫に歌を贈ったのは、兼家が町小路の女と通じて足が遠のいていた時期に、時姫もまた同じ状態だと知ったからである。「そこにさへかるといふなる真菰草いかなる沢に根をとどむらん」に、時姫も「真菰草かるとは淀の沢なれや根をとどむてふ沢はそことか」と返歌する。結婚したての頃は自分の所にだけ来てほしいと願っていた道綱母も、その時の時姫の気持ちがようやくわかったのだ。しかし時姫の所にも行っていないと知ってこのような歌を贈る辺り、少々嫌みではないだろうか。だがどちらにしても、どちらの女からも男が離れていることは確かなので、寵を争うより慰め合っているようだ。数年後の道綱母からの「ふく風につけてもとはむささがにの通ひし道はそらにたゆとも」「色かはるころとみればつけてとふ風ゆゆしくもおもほゆるかな」も、考えようによってはキツイ贈答だが、親近感が感じられる。そして十年後。

祭り見に出でたれば、かの所にも出でたりけり。さなめりと見て、むかひに立ちぬ。待つほどのさうざうしければ、橘の実などあるに、葵をかけて、

あふひとかきけどもよそにたちばなの

といひやる。ややひさしうありて、

君がつらさを今日こそはみれ

とぞある。「にくかるべきものにては年へぬるを、など

『今日』とのみ言ひたらん」と言ふ人もあり。帰ってきてありしなど語れば、『食ひつぶしつべき心ちこそすれ』

とやいはざりし」とて、いとをかしと思ひけり

葵祭に出た道綱母が時姫の向かいに車を停めさせ、あなたは立花のように知らんぶりして立っていますねと贈ると、時姫は、知らんぶりしているあなたの薄情さが今日こそはつきりわかりましたと下をつけてきた。後でこれを聞いた兼家が「食ひつぶしてしまいたい」とは言っただけでなかったか、と言っているが、普段の時姫の言動からするとそう言いかねなかったのか。歌を見ていると確かに道綱母に負けていないと思う。だが、ふたりは仲良くはできなくともどこかで通じ合う部分があったのではないだろうか。それは嫉妬心、浮気な夫を共有する気持ちという悲しいことだったにしろ。

『源氏物語』でも、落葉宮に入れあげている夕霧に愛想をつかして里帰りした雲居雁にあて、夕霧のもうひとりの妻藤典侍が「数ならば身に知られまし世の憂さを人のためにも濡らす袖かな」と贈っている。雲居雁は「人の世の憂さをあはれと見しかども身にかへむとおもはざりしを」と返歌した。典侍は時々文を送っていたが、雲居雁が返事をしたのは初めてだったかもしれない。「憂さなんて他人事と思っていた」雲居雁には、典侍の存在は許せなかったが、夕霧と自分は幼なじみだし、結婚するまで色々経緯もあるし、子供も大勢いるし、何より自分の方が身分が高いという驕りがあつたらう。それが皇女の出現で、安住していると思っていた妻の座の脆さと人心の変わりやすさを知り、ようやく典侍の心を理解できたのではないか。

男を挟んでしか見ていなかった人を、ダイレクトに感じたのだ。探り合いつつも互いの心に触れ合った瞬間である。源氏物語

が元々蜻蛉日記を意識しているのだろうが、新たな愛人の出現で急に連帯感を持つ、エゴイストな女達の関係はよく似ている。

女性どうしの恋敵の贈答は、嫌みで皮肉なように見える。しかし歌が交わされる状況になる過程を考えた時、やはり男への愛情が薄らいだからだと感じずにいられない。言葉が悪いならあきらめといつてもいい。身をひけという脅しではなく、相手のために泣こうという殊勝な歌は、恋敵の立場を思う余裕が出てきた、つまり恋人への執着心が減ったことを意味するのだろう。

一方、男同士の方が緊迫したやりとりをしている。妻が多いといつても、女の数が男より多かったわけではないので、女のもとで鉢合わせすることも多々あったらしい。

また、匂宮のように、他人のふりをして女の元に忍んでいくことも実際あったのだ。

おなじ少将（注・藤原義孝）かよひ侍りける所に、兵部卿致平のみこまかりて、少将のきみおはしたりといはせ侍りけるを、のちにきき侍りて、かのみこのもとにつかはしける

あやしくもわがぬれぎぬをきたるかな　みかさの山を人に
かられて
(拾遺119)

義孝の恋人の所に、「少将が来ましたよ」と忍び込んだ致平親王は官職も匂宮と同じ兵部卿で、しかも三の宮である。「三笠山」は近衛の異称で、致平のかたった近衛少将の名を不すと同時に、傘をとられて衣が濡れた、濡れ衣にもかかってくる。義孝は若いのに、歌はずいぶん詠みなれているようで、このクレームも戯れのように感じられてしまう。三歳年長の致平とは親しい付き合い

で、日頃から女の取り合いをしていたのかもしれない。

だが次の歌は、そんな悠長な場面ではない。

人のめにかよひける、みつけられ侍りて　賀朝法師

身なぐとも人にしられじ世の中にしられぬ山をしるよしも
がな

返し　もとのおとこ

世の中にしられぬ山に身なぐとも谷の心やいほでおもはむ

(後撰1163
1164)

他人の妻に通っていた男が、夫に見つかつた。おそらく現行犯だったのだろう。そこで詠んだこのふたつの歌は、あまり技巧的ではない。「知る」を重ねた賀朝の歌はともかく、夫は心に浮かんだことをそのまま言ったようだ。熟考した歌ではなく、その場でのやりとりだからだろう。この賀朝法師、出家前である可能性もあるが、「誰にも知られたくない」と言っているくらいだから、この時すでに僧だったのではないか。そうすると彼がこまで恥じ入っており、夫がこれほどなじる理由もわかる気がする。

さて、女同士の場合、ずっと互いの存在を知っていて何かの機会に贈答が行われることになるが、男だと、他の恋敵がいることが判明したところで騒ぎが起きている。この時代は男も女も割と自由に恋愛していたと言われ、確かに光源氏のモデルのような人物も多いが、色々な男性遍歴が伝えられる女性でも、同時進行より次から次へという方に近かったのだろう。他の男がいるとわかつて騒ぎ立てるのはそういうことなのではないだろうか。

恋敵同士の贈答があまり残っていないのは、やはりただ憎らしいだけの相手には歌など贈らないからだろう。何か連帯感を持

ったり、共通するところを感じたりして初めて交流できるのだ。そしてそれが歌によるのは、さりげなく何気なく、しかも嫌みまですこめて伝えることができたからだったのだろう。

おわりに

恋歌は、三代集においてはほぼ三分の一を占める部立である。特に後撰集は半分以上恋歌だといってもよいほど多い。『宇津保物語』に「艶書の和歌なきは、人あなづらしむるものなり」と言われるように、恋には和歌がつきもの、というよりなくてはならないものだったのだ。

それは、歌という非日常的な形態をとることで、言葉に呪力を持たせ、相手の心に働きかけることができるからであり、そしてまた和歌でこそ自分の想いを赤裸々に訴えられるからでもある。生活の中で、和歌は自分の真情を託すものとして機能していた。もちろん、必ずしも本心ばかりとは言えず、大げさに言う場合も多々あったことと思うが、貴族社会の社交の具としても不可欠なものだったことはまちがいない。そして恋愛の場面でもっとも重視されたことは言うまでもない。

だからこそ、恋愛のどの場面でも歌が詠まれ、心がやりとりされるのだ。そしてまた、贈答をするということは互いを認めることでもあった。求婚に返事するのはそれを受け入れることにつながるし、また、恋敵どうしは連帯感を持ったとき贈答する。答歌を詠むのは、贈歌を踏まえ、それに対抗しなければならぬという点で、贈歌をつくるより数段難しいので、どうでもいい相

手に返すようなものではなかったのかもしれない。

異性の贈答を見てきたが、だいたいが恋仲の贈答で、友人関係と言うものはあまり見あたらなかった。しかし皆無ではないので、機会があればさらに範囲を広げて異性間の友情についても考えてみたいと思う。

〔注〕

〔1〕齋木泰孝「女房と女君(六)——歌をよみかける女たち——」

『国語国文論集』二五号 安田女子大学日本文学会 一九九

五

〔2〕小町谷照彦「源氏物語の求婚の贈答歌」『王朝文学の歌こと

ば表現』若草書房 一九九七 所収

〔3〕後藤祥子「女流による男歌——式子内親王歌への一視点——

『平安文学論集』風間書房 一九九二 所収

(やましろ みお・東京都立園芸高等学校司書)